

氏名	田崎 琴絵
学位の種類	修士 (生活科学)
学位記番号	生修第230号
学位授与年月日	平成31年3月15日
学位授与の要件	学位規準第15条第1項
学位論文題目	論文題目 中学校家庭科における制服を利用した服育
審査委員	主査 石原 久代 教授 副査 橋本 令子 教授 副査 井上 尚子 准教授

## 1. 緒言

日本の中学校・高等学校の多くは、制服の着用を定めており、中学校において、女子はセーラー服、男子は詰襟式の学生服が多く、中学入学時の1年生の制服は、進学にあたり、学生服購入時に身体の成長を考慮して大きめのサイズを用意する家庭が多いため体型に合っていない場合が多い。しかし、3年生になると逆に生徒自身の成長が著しく丈や幅が足りない人も多く、また、制服の状態も、生地のカリやほつれが目立ち、名札やボタン、スナップが取れかかっている生徒も多い。こうした現状は中学校家庭科における衣服分野の学習が実際の衣服に活かされていないことを物語っている。

そこで、本研究では、最も身近にある制服を家庭科の学習教材として取り上げることで、中学校での衣生活分野の教育をより実践的に展開し、服育を推進しようと考えた。具体的な内容として、中学生自らが、体温調節、環境衛生、手入れ・修整しやすいよう、ボタン付け、ホック、まつり縫い、などの基本的製作技術を中心に、家庭科教育で展開しやすい学習教材の作成を試みることにした。

まず、身体変化の把握と現在の制服の縫い代を検討するとともに中学入学直後の生徒にアンケートを行い、衣服に関する関心・知識理解の現状を把握し、学習指導要領に基づく衣生活分野の学習を制服と関連づけて2学期間指導後に行ったアンケート結果をもとにその教育効果と課題について検討した。さらに、現在初等・中等教育で積極的に導入しているICTの効果的な活用により主体的・協働的な学びを目指したコンテンツを試作し、その教育効果について検討した。

## 2. 方法

### 2-1 中学生の身体変化の把握・検討

中学生の身体変化に適合するサイズの検討を行うため、13～15歳の身体計測データから身体変化の測定値と20～24歳の成人の平均値を基準としたモリソンの関係偏差折線をもとに成長の著しい部位とその計測値を求めた。

### 2-2 現在の制服調査 (縫い代の大きさの把握・検討)

中学生向けの制服の構成の実際を知り、3年間の中学生の成長に必要な縫い代の検討を行うために、実際に着用

されおり、形状の異なる学制服6着を試料として、縫製上サイズ修正が可能な縫い代があるかについて測定した。

### 2-3 中学生における服育に関する調査 (入学直後)

中学での衣服教育受講前の生徒の知識を把握するために名古屋市立の中学校に入学したばかりの1年生263名(男子132名、女子131名)を被験者としてアンケート調査を実施した。質問内容は、ファッションへの興味、普段の服装の参考媒体などの衣服の関心に関する項目、普段の服装の購入や着装方法などの衣服計画に関する項目、制服の洗濯、片づけ、管理、補修などの衣服の衛生管理に関する項目、サイズが合わなくなった制服の処分方法などの環境や資源に配慮した衣生活に関する項目など計21項目である。調査は2017年4月に行った。

### 2-4 中学生における服育に関する調査 (学習後)

2学期間にわたり制服を各単元で意識させた授業を実施した後、その教育効果を検討するため、衣生活分野の学習を終えた先の被験者と同じ1年生260名(男子128名、女子132名)を対象にアンケート調査を実施した。質問内容は、中学校家庭の学習指導要領に基づく衣生活分野の知識・理解を中学生の制服と関連づけた質問項目であり、制服の働きに関する項目、衣服製作技術に関する項目、今後の衣生活の関心項目など計37項目である。調査は2017年12月に行った。

### 2-5 Preziを用いた制服補修の電子コンテンツの作成

Preziは人の思考構造に近い動きをスクリーン上で可視化できるブラウザ上で動作するオンラインプレゼンテーションツールである。クラウド化されているので、他の学校の教員とも共有、編集することができ、マルチデバイス対応であるため衣服学習教材を作るのに最適なICTコンテンツといえる。

本研究ではPreziを使い、挿入する縫製に関する動画コンテンツは、障害ある生徒の利用も考慮して、音声と字幕付きの動画を作成した。使用したソフトは、音声にはALTトーク、字幕や動画編集にはPower Directorを使用し、字幕のフォントはUDを使用した。このコンテンツは中学生が自分で、制服の補修や手入れができるように配慮した家庭科電子教材である。

## 2-6 電子コンテンツの使用による教育効果の実験

試作した電子コンテンツの評価と課題について検討するために、昨年、2-3、2-4の実験に参加した中学生の中から101名（男子51名、女子50名）を被験者として電子コンテンツを使った授業を体験させ、その後、教育効果に関する13項目についてアンケートを実施した。実施は2019年1月であった。

### 2. 結果および考察

#### 3-1 中学生の身体変化の把握・検討

中学生の身体計測値について成人男女の平均値を基準に作成したモリソンの関係偏差折線から13~15歳における男子の身体変化が著しい項目は、身長、後ウエスト高、股下高、背肩幅、胸部横径、ウエスト幅、腰幅、頸付け根囲、胸囲、臀囲、そで丈、上腕囲であり、中学生男子の体長変化は、成人に向かって大幅に変化している。同じく女子は、胸部横径、ヒップ幅、乳頭位胸囲、臀囲、体重が大きく変化し、成人女子に近づいていることが判明した。

#### 3-2 現在の制服調査（縫い代の大きさの把握・検討）

上半身においては、ほとんどの制服で縫い代が5~10mm、上着の裾のヘム幅は20~40mmであった。下半身においても同様であり、3年間の成長量と衣服構成において必要な縫い代の配慮からも、現在の制服の縫い代は一般的な衣服の縫い代の限界値であり、縫製上のサイズ修整は難しいことが判明した。この結果から女子は、3年生になると胸回りが窮屈で、腕が上がり難くなり、男子については、詰襟のホックを止めると息苦しく、袖丈やパンツ丈が足りなくなることが予想できる。

#### 3-3 中学での衣服教育受講前の知識のアンケート結果

衣服の衛生管理について、制服の所持数は冬は上下1着ずつ、夏は上が2着、下2着と最低限の枚数しか持っていないなかった。制服の洗濯は約70%が家庭で洗っているが、洗濯はほとんど親がするのに対し、洗濯物を畳む作業は積極的に参加していた。しかし、アイロンがけや制服・普段着の補修やスナップ・ボタンつけは、親が行っている。環境や資源に配慮した衣生活については、サイズが合わなくなった制服の処分方法について、譲るが約40%と最も多く、次いで直してもらいが約25%であった。これらの結果から、中学生になり、自分でできることは自分であるという意欲は見られるが、洗濯や衣服の手入れや補修は、まだ保護者に任せている生徒が多く、衣生活の自立を実践的に学ぶ必要があることが判明した。

#### 3-4 制服を使った衣服教育受講後のアンケート結果

制服を用いた衣生活分野の学習後の調査では、制服の働きについては、職業や所属集団を表す、社会的慣習に合わせるなど、衣服の社会性の働きを理解し、制服を着用することで、集団意識が芽生えているといえる。制服を正しく着ることの印象については、真面目な人、信頼できる人、優しい人と好印象なものが多く、衣服を通したノンバーバルコミュニケーションの役割も十分な理解がみられた。

制服の補修などの基本的製作技術については、制服のスナップ・ボタンの付け直し、ズボン・スカート丈の直しについては不安を感じる生徒が半数いた。このことから、基礎縫いなどの基本的製作技術の向上と、実際に、ズボン丈やスカート丈の直しをまつり縫いするなど、制服と関連した実践を行うべきであると考えられる。

基礎的縫製作業については教師側から見ると出来栄への差は大きかったが、生徒はやり遂げた満足感が先行し、積極的に取り組んでいこうという生徒が多かった。

最も身近な制服を取り上げた服育の教育効果は高く、制服に対して正しい理解が十分得られたと思われる。衣生活の自立については、3年間の計画的な活用に関して意識は高まったが、制服の補修などの基本的製作技術については、未だ不安に感じている生徒がいた。

このことから、今後自分自身で制服の補修などを実際に行ってみると充実感が手伝って、さらに興味が持てるものになると考える。

#### 3-5 電子コンテンツの使用による教育効果の実験

制服を題材として試作したPreziによる電子コンテンツを中学生に見せ、行った実習およびアンケートの結果、動画があることについては75%以上がわかりやすかったと回答し、見やすさや音声についても好意的であった。今回、大型テレビを用いて同時に見せたことで見難い生徒もあり、各自の進度に合わせてタブレットを使用できると、より効果的であったといえる。しかし、実習については1年間のブランクがあったため、うまくいかない生徒もあり、定期的に繰り返しやることの重要性が窺えた。

### 4. 総括

中学生男子・女子とも3年間で成人に向かって大幅に体長が変化しており、特に周径、高径項目の変化が著しい。現在の制服の縫い代は非常に少なく設定されており、この身体変化に合わせてサイズ直しをすることは難しいことが判明した。

また、服育の観点では、入学直後の中学生は、男女とも自分でできることは自分でしたい意欲が見られるが、洗濯や衣服の手入れ、補修は保護者に任せている生徒が多く、この時期に衣生活の自立を実践的に学ぶことが効果的であると考えられる。身近な制服を利用した2学期間の服育の教育効果は大きく、今後自分自身で制服の補修などを実際に行ってみることに積極的意見が多かった。しかし、衣生活に関する単元がなく1年過ぎた後にPreziを使ったICTコンテンツを見せて再度スナップ付けの実習を行った結果、電子コンテンツについては好意的意見が多かったが、理解しやすかった、今後自身でコンテンツを利用して作りたいなどの項目については男女間に有意な差が認められ、女子の方が積極的で、この時期に性差が生まれることが判明した。今後、家庭科の内容を学年ごとで衣食住を仕切るのではなく、継続的に触れられる仕組みを考える必要があることが判明した。